

# 戯曲セミナーってどんなところ？

**長田育恵さんは2007年度の「戯曲セミナー」の卒業生です。いまではプロの劇作家として大活躍しています。**

——長田さんは受講前に、ミュージカルを書いていたそうですね。

大学のときはミュージカル研究会に入っていて卒業後は社会人しながら、主にファミリーミュージカルを書いてました。でもそのうち現代演劇を書きたいと思い始めて。

ちょうどそのときに「戯曲セミナー」というものがあることを知って、ここでゼロから学ぼうと思ったんです。ちょうど30歳になるときでした。やっぱり転機だったのかも知れないですね。

——実際の講義はどうでしたか？

ミュージカルの脚本を書いてきたから、大体の基礎はわかっているんじゃないかなとも思ってたんですけども講義で聞くことは知らないことばかりでした。横内謙介さんやマキノノゾミさんや坂手洋二さんが挙げてくれた戯曲、何ひとつ読んだことがなかったんですよ。ともかく講師の先生方が挙げるものは全部読んで、芝居もそこから集中的に見て。



**長田育恵** てがみ座主宰、NOTE Inc. 所属劇作家。1977年生まれ。東京都出身。2007年に「戯曲セミナー」を受講し、翌年に同研修課で井上ひさし氏に師事。2009年『てがみ座』を旗揚げし、全公演の戯曲を手がける。2015年『地を渡る舟』（再演）で文化庁芸術祭演劇部門新人賞、2016年『蜜柑とユウウツ〜茨木のリ子異聞〜』で鶴屋南北戯曲賞。2018年には青年座『砂塵のニケ』、てがみ座『海越えの花たち』、PARCO プロデュース『豊饒の海』の脚本に対して紀伊國屋演劇賞個人賞。NHK 特集ドラマ『マンゴーの樹の下で〜ルソン島、戦火の約束〜』などドラマや映画のシナリオにも活動の幅を広げるほか2020年にはPARCO 劇場オープンングラインナップ『ゲルニカ』、劇団四季オリジナルミュージカル『ロボット・イン・ザ・ガーデン』などの大作も開幕を控える。

演劇は趣味という方たちもたくさんいて楽しい

人間を書くんだっていうことも初めて知りました。キャラクターを書くのではなく、生の人間の皮膚の内側や息吹みたいなものを書く。

——そのほかに印象に残っている講義は？

土田英生さんの講義では、ふたりの人物の関係を5行の台詞で表すっていうのをやりました。プロットの講義では、自分があまりに書けなくて愕然としましたね。でもプロットを取捨して捻り出すとすると、これまでなかった思考回路が現れる。それまでは主人公のこじか考えられなかったのがサブキャラクターのオープンングからエンディングまでの人生を大事に書けるようになったりもするんです。

長谷基弘さんから、事柄を単位ずつカードに書き出してシャッフルしてストーリーを組み立てるという話も聞いて、自分の歩き出す地面をちゃんと固めてから書き出すんだって思ったりもしました。

——クラスの雰囲気はどうでした？

毎年だいたい50人くらい、10代20代の方から60代70代の方まで集まっています。

雰囲気でした。でも書くことを職業にしたいという、私と同じくらい真剣な人もいっぱいいて。私も熱をもちつつ、私が他の人のための熱にもなるし、どこまでがんばっても恥ずかしくないっていうのがすごく心地よかったです。

——プロの劇作家を目指す人、趣味で演劇を学びたい人、映画や小説を志す人…このセミナーはどうでしょう？

どんな方でも受けて損なこととはひとつもないと思います。人生の新しい引き出しを得られます。観劇が趣味なら、お芝居の新しい観点を得られる。小説やシナリオを書くこととしていても、作品の構造や柱の立て方、登場人物の行動原理を、こんなに教わる場所は他にないんじゃないかな。

——戯曲を書くということについて思うことがあれば。

私はゼロの状態でセミナーに来て、それから劇団を旗揚げして、一作ごとに何かを克服するスピードが早くなってるなと我ながら思っています。実践こそが一番の吸収だと思って必死になったんです。だから、戯曲セミナーに来て実践の方法を手に入れると変わるよって思います。

——戯曲セミナーに通ったことは、長田さんにとって大きなことでしたね。

人生を変えてくれました。最初は小さな金額ではないから躊躇したんですけど、でもそれで未来への切符が手に入る。2007年の戯曲セミナーに来なかったら、私のいまは確実にはないですから。



**赤澤ムツク** カム・トゥール所属劇作家、演出家、俳優。1978年生まれ。北海道出身。2001年に「戯曲セミナー」を受講し、「劇団唐組」を経て2003年より「黒色綺譚カナリア派」を主宰し、2011年に活動停止。近年は、三越劇場の『さくら色 オカンの嫁入り』（2013、他）、AiiA 2.5 Theater Tokyo の『マジすか学園〜京都・血風修学旅行〜』（2015）、『終りのセラフ』（2016）、銀河劇場の『刀使ノ巫女』（2018）、梅田芸術劇場・新神戸オリエンタル劇場等の『あんさんぶるスターズ！』シリーズ（2017、他）、明治座『将の器〜泣くよウグイス HEY!HEY!HEY』（2015）、『ゆくゆく・る年冬の陣 師走明治座時代劇祭』（2017）、『明治座の変〜麒麟にのる〜』（2019）など、大劇場作品の脚本・演出を数多く手がける。

——一期生。その年の様子はどうでした？

平均年齢がけっこう高かったんです。40代50代の方も多しなど。全員が劇作家志望というわけではなかったんですが、何人かで勉強会をやったりもして

学と高校も演劇部だったんですが、札幌出身なので東京では知り合いが少なくて。なのでセミナーに通い、劇作家協会にも入りました。劇団黒色綺譚カナリア派をつくる1年前、20歳のときです。

子ども頃から戯曲や小説を書くのが好きで、中ひとつが連載漫画にできそうな設定だったことから始めました。

——演劇が映像や漫画に広がっていったんですね。

芝居だと、条件がアイデアを生んで、話の設定ができあがることもある。演劇でつくるからこそ発想した物語の根っこって、すごく面白いと思う。あと、とりあえず形にしてみることも演劇は一番早いし、クリエイティブな自由が保証されている場所です。ここから面白いものが生まれ、漫画だったり映画だったりテレビドラマだったり、全く別の形に出していくってアリだよね。これってどこでつくられたの？「元々は演劇なんです」っていうものが、もっと増えていくと思う。

——セミナーの講師として授業では、生徒さんにとどういうことを伝えていますか？

セミナーにはほんとにいろんな方がいますよね。年齢層もばらばらで、でもみんな熱心で食いつくように聴いている。ほくの授業のパターンとしては、こ

——受講を迷っている人になにか伝えることはありますか？

劇作家志望の人にはもちろんなんですけど、俳優とか演出家とか制作とか、演劇に携わる人みんなに勧めたいです。演劇の一番根っこが戯曲だから、その理解を深めるために。

映像をやる人にも役立つと思います。会話だけで成立させることを学んでいける。小劇場から深夜ドラマの脚本とかに引張られることもあるよってですね。あと、戯曲って趣味になるじゃないですか。映像シナリオを趣味で書く人はいないけど、戯曲の場合は、書いて友だちで集まって声に出して読めば一応完成する。ものすごく可能性があるものならそこらばつと広がっていく。

なにかを始めるためにいい場所なんじゃないかなと思いますね、戯曲って。



**前川知大** イキウメ 劇作家、演出家。1974年生まれ。新潟県出身。2003年に「イキウメ」結成。2013年より「カタルシツ」開始。2010年『関数ドミノ』『奇ッ怪〜小泉八雲から聞いた話』で芸術選奨文部科学大臣新人賞、紀伊國屋演劇賞個人賞、2011年『フランクの踊り場』で鶴屋南北戯曲賞、2012年『太陽』で読売演劇大賞・最優秀演出家賞、読売文学賞。2014年にはスーパー歌舞伎も手がける。2005年初演の『散歩する侵略者』は舞台として再演を重ね、2007年に小説、2017年に映画・TVドラマ公開（いずれも黒沢清監督）。『太陽』は劇団での再演に加え、鶴川幸雄氏の演出でも上演、2016年に小説および映画公開（入江悠監督）。コミック原作に『リヴィングストーン』（片岡人生 漫画）。

広がる、劇作家の世界。学ぶことから、始まります。

うから、まずひとつ、好きを深めてください。

**前川知大さんは現代を代表する劇作家の一人です。創作だけでなく映画、小説、漫画原作など幅広く活躍しています。**

——創作活動のスタートは映像からなんですね。

大学の映画サークルです。物語をつくりたいっていうのがベースにあって、シナリオを書いてはいたんですけど、卒業したら機材がなくて映画もつくれなくなった。で、シナリオや小説をいろいろ書いてみて、ああ自分は会話が好きなんだなって気づいたんです。その頃、映画に出演してくれた大学の劇研メンバーが劇団をつくった。何本か書かせてもらって、面白いから前川を座付き作家にしてやろうぜって始まったのがイキウメです。結成は2003年でした。

——前川さんの創作のスタイルはどうやってつくられてきたんでしょう？

芝居の本を書き始めたころは、映画的に書いてしまっってシーンも多すぎたんでしょうね。演出家にどうやっていいかわからないと言われた。それから演劇を観るようになって。5作品くらい書いているうちに、映像みたいに書いている人もいるな、演出でどうにかできるんじゃないかなと思いはじめた。そこでもう一度、カット割りでシーンが変わるような本を書いたんです。イキウメの2本目でした。演劇のテンポ感というか、会話の密度みたいなものには徐々に慣れていきました。そうなる、演劇で表現できるものは映像より断然多い。

——劇団以外の公演も多く、映画、小説、テレビドラマ、漫画原作なども手がけていますよね。

いろいろやっているように見えて、実はそんなにたくさんすることはやってないんですよ。劇団の創作から派生したものを外に持っていくことが多くて。映画『散歩する侵略者』と『太陽』もそうです。漫画は演劇の好きな編集者が、前川さんの原作でなにかやりましようと言ってくれて。劇団でやった短編集の

——これから戯曲を学ぼうとする人に一言。

自分の思いは整理しないと人に伝わらないと知ったことですね。若いころって、思いのまま書けば傑作ができると思うじゃないですか。教えられてすぐそれができたとは思わないですけど、もし受講しなかったら、いまだに自分の感情を垂れ流していたかも知れませんね。

学ぶことにより、もつと演劇が好きになれると思